９．一滑沢の開墾

武　田　時　光

※明治４２年３月１日生。父宇一。

父が上士別から、一滑の沢へ通い作を始めたのは大正６年で、土地は、後藤大五郎から買ったものです。

私たち家族が、引越ししたのは、下川まで鉄道の通った大正八年で、父の建てた小さな草小屋に入りました。

道路は、札滑六線から峠一つ越える山道で、刈り分けだけの笹の切り口が足に刺さるような酷いものでした。

小さな草小屋の附近は、大きな木ばかりで、あの沢に私の家がたった一軒しかない、大変な所だったので、父がいるとき話をすると叱られるので、父の居ない時は、どうして上士別の広い原野から、こんな山奥に来たのかと、ぼやいてばかりいました。

次の年に、親類になる真鍋源太郎が入り、続いて、役場に居る太田さんの親たち兄弟や、平間仲義さん等が入殖して、６戸位になり幾らか淋しくなくなりました。

しかし道路は少しも良くならず、１０年近くも刈り分け道のままで、裸馬と人しか通れない道でした。父は、頑固でしたから、冬の馬橇の使える時期に、一年分の食糧や、日用品を運んで終う有様で、他の人も余り気にしなかったのでしょうか。

収穫した雑穀を運ぶのに、一滑沢の出口の笛田さんの所へ出たが、冬だけ馬橇で運搬し、値段が気に食わないと、２年位も積んでおいたものです。
この道路も父が付けたもので、橋だけでも２７もありました。

上興部の市街や学校に通うのに、このころは他人の土地を通るのが喧しくて、遠回りして、基線や号線を通りましたが、道路の悪いのには泣かされました。

作物は、馬鈴薯や、ハッカ、除虫菊を作り、江戸嘉助と言う人が澱粉工場を止めた後を、父が引き受けてやり、江戸さんは後に、稲田さん附近で小さな店をやりました。

一滑には、清水という炭焼きが入ったり、橋場長松さんもいたことがあり、戦後、長岡猶さんが入ったが、あの沢の最後の居住者でした。私たちが、あの沢を出る時は、１６町歩ほど開墾しておりましたが、一滑の開拓時の辛さは、忘れることができません。